

# 美術教育における伝統文化に基づいた主体性形成に関する研究

## The Study on the Formation of Subjectivity Based on Traditional Culture in Art Education

Yaning Zhang 張 亞寧

### 目次

#### はじめに

#### 1. 本研究の背景と課題

#### 2. 美術教育と伝統文化および主体性の関係

2-1. 伝統文化を強化する要因

2-2. 美術教育の主体性と文化の伝承

2-3. 主体性形成と伝統文化の美術教育との関係性

#### 3. 美術教育における伝統文化に基づいた主体性の形成

3-1. 生徒の主体性形成の目標と義務教育の目標との関係

3-2. 生徒における主体性形成の内容と美術教育

3-3. 生徒における主体性の機能と形成

3-4. 教育側の主体性の機能と形成

3-5. 移動教育の手法による主体性形成の提案

#### 4. 切紙を題材とした主体性形成

4-1. 伝統文化の切紙に関する教育研究と主体性形成についての調査について

4-2. 主体性形成に関する切紙の表現と造型についての「改善案」と実践

4-3. 切紙に関する「改善案」の教育効果と課題

#### おわりに

#### はじめに

現在、「主体性」という言葉は日本と中国の美術教育政策および現場でよく使われている<sup>1,2</sup>。また「伝統文化」という言葉も国を挙げて強調されている<sup>3</sup>。しかし、本研究の「美術教育における伝統文化に基づいた主体性形成」に関わる先行研究については、主体性と伝統文化それぞれに関する研究は多々あるが、本研究のような総合的なものは未だ少ない。

本稿では、まず研究テーマに関わる課題について述べ

る。次に美術教育と伝統文化および主体性との関係性について検討する。そして美術教育における伝統文化に基づいた主体性形成を分析し、実践に基づいた「改善案」を提示する。

#### 1. 本研究の背景と課題

義務教育段階の生徒の主体性形成は、美術教育を含む基礎教育における重要なテーマである。中国教育界では、1981年に「主体性教育」の概念が提示され、十数年の間に理論と実践の両方から研究され、生徒の主体性教育の目的・原則・内容および評価の項目など、現場での実践と研究会等での検討が繰り返されて、多大の成果が得られている<sup>4</sup>。この主体性教育を基盤として素質教育の概念が提出され、生徒の主体のもとで、能力によって総合的な「素質」を教育しようとする理念が主張されている。<sup>5</sup> また生徒の主体性形成について、より学習活動が強調されて、主体性形成の基準は、知識をいかに習得するかどうかによって判断される傾向にある。<sup>6</sup> 近年、教育の分野で主体と主体との関係をどのように扱うか、あるいはどのように教育するかが検討されている。<sup>7</sup>

美育については、1903年に中国では王国維が初めて教育体系に「美育」を「智育」、「德育」および「体育」と並べて提示した<sup>8</sup>。1949年から1978年までの中国では、その「美育」が批判されたが<sup>9</sup>、改革開放の1978年から1998年までの20年間の議論を経て<sup>10,11</sup>、1999年に国の「素質教育」の教育方針の中に、「感情教育」として「美育」が導入された<sup>12</sup>。中国の学校教育のなかで美育は、小中高校では直接に関わる教科としては、芸術教育（美術教育と音楽教育）があり、さらに「德育」、「智育」および「体育」と結びつけられて、全面的な人格を育くむものとされている<sup>13</sup>。特に美術教育は、生徒の視覚意識、芸

術的な表現と審美眼を培うことを基本的な目的とし、美育の中心教科として位置づけられている<sup>14</sup>。

中国の美術教育に関わる環境は、変化がきわめて激しい。近年、市場経済の影響が世界を席卷している。この市場経済、自由経済の動きによって、モノと人の移動が拡大し、さらに電子情報ネットのハードウェアやソフトウェアなどの進歩に伴う情報の氾濫によって、世界は急激なグローバル化に突入している。他方で、中国は数千年の教育の歴史を持ち、隋唐の時代に作り上げられた独特な「科挙試験」が現在にまで影響を及ぼしている。近代に全国統一入学試験が始まり、「応試教育」が誕生し、近年の教育改革の目玉として「素質教育」が登場しても、統一入学試験の科目を中心とする強化教育の主導性は、現在もなお強く中国の教育現場に表われている。そのため、統一入学試験の科目とされない美術教育の環境は厳しい状況にある。日本でも大学入試センター試験などで、やはり「入試教育」があり、美術教育に関わる環境は厳しいと言える。中国と日本では程度の差はあるものの、美術教育に関しては、授業時間が少ない、またはそのための予算が足りないという共通した状況が続いている。

伝統文化に関しては、中国政府は2017年1月25日に〈中華優秀伝統文化の伝承と発展のプロジェクトに関する意見〉を公表し、国の最高レベルから自国の伝統文化を重視する姿勢と対策を打ち出している<sup>15</sup>。日本では、2001年に「文化芸術振興基本法」が制定され、関連する施策の総合的な推進を図るため、日本政府は、概ね5年に1度「文化芸術の振興に関する基本的な方針」を策定し、「文化芸術立国」を目指している。また2006年12月に改正された教育基本法において、教育の目標の一つとして「日本の伝統や文化を基盤として国際社会を生きる日本人の育成」（第5号）が明示された。さらに、2014年度文部科学省は文部科学白書として、〈特集1 2020年に向けた文化政策の戦略的展開〉を公表し、「日本の文化財や伝統等は、世界に誇るべきものであり、これを維持、継承、発展させることはもとより、日本人自身はその価値を十分に認識した上で、国内外への発信を、更に強化していく必要」であると提示している。

以上の背景や現状からは、日本と中国では程度の違いはあるが、「美術教育における伝統文化に基づいた主体性形成」について、それぞれに次のような研究課題が挙げられる。

まず美術教育・伝統文化・主体性の関係を巡っては、現在のところ、それらを統合しながら検討した研究は未だないため、こうした関係の在り方を明らかにする必要がある。

続いて、美術教育のうちに伝統文化を導入する際に、学生の主体性形成の目標と内容を明らかにする課題を設定

しなくてはならない。また、その際に、どのようにして「主体性」を育成するかが課題となる。

以上の課題を解決するために、伝統文化としての「切紙」を題材とした表現を通じて、本研究が提出する応用事例によって、「美術教育における伝統文化に基づいた主体性形成」に関する新しい可能性を示す。

## 2. 美術教育と伝統文化および主体性の関係

### 2-1. 伝統文化を強化する要因

世界の急激なグローバル化の流れに即した対応策として、各国政府がいち早く打ち出している政策として、伝統文化の重視と教育への導入がある。伝統文化の教育は、現在の生活を見直し、地域及び社会をより良くしていこうとする態度、あるいは他国の伝統や文化を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を育むものと捉えられている。伝統文化を一つの政策として採用する場合、例えば次のような事項の検討、すなわち民族（国民）文化を、歴史文化、伝統文化、現代文化、外来文化といった区分に分けて考察するということが必要となろう。

この場合には、強い生命力によって貫かれてきた伝統文化は、歴史文化、現代文化および外来文化などと比べて、民族（国家）の存続にとって、より重要な構成要素であると考えられる。歴史文化、現代文化および外来文化と比べて、伝統文化は、民族（国民）文化の核ともなる要素である。歴史文化、現代文化および外来文化が人間を総合的に発達させるものだとすれば、伝統文化は、主に民族（国家）性を育てるものと理解することができる。以上より、国および地方政府が伝統文化を重視することは、民族（国民）文化の要素を取り入れることに結びつくことを明らかにしたい。

しかし伝統文化は、その歴史的な性格のため、時代の変化と調和しにくい一部の要素によって、社会の進歩を阻害したりすることも時々あろう。またこうしたことが災いし、逆に政治利用されて、国と民族にとっての不幸ともなることも十分考えられる。十年間にも及ぶ破壊的な「文化大革命」を発動した最初の理由も、伝統文化の氾濫を排除することからであった。従って、伝統文化を「排除するか」、あるいは「重視するか」については、国民文化あるいは民族文化に対する慎重で理性的な対応が求められよう。

### 2-2. 美術教育の主体性と文化の伝承

美術の主体・客体について、表現者と鑑賞者は、表現者主体と鑑賞者主体として扱い、表現物と自然を客体として扱う。美術の活動において、表現者と鑑賞者との交流がなされる場合、表現物を媒介として交流が実現され

る。鑑賞者が解釈する場合、表現物が完成する時と鑑賞する時の間に、時空的な差がある。また表現者の訓練に基づく表現手段と手法による表現は、表現者の意識を思うままに伝えられるかどうかという差異がある。さらに、不特定な鑑賞者の美術に対する習熟度の差と、表現物の解釈が適切に出来るかどうかなどの問題が鑑賞にはある。

このように表現者の発信と鑑賞者の受信との間に、コミュニケーションが容易に成立するとは言えない。美術の主体性には、自主、自律、創造などの共通性以外にも、美術独特の視覚、造形、感覚といった特異性がある。伝統文化と民族文化において、美術は普遍的な要素として挙げられ、民族の特性も附帯する。

広義の文化から捉えると、美術教育は文化の一部をなす。美術教育は、人間を社会と集団の一員として成長させるため、社会と集団が担う任務と責任の一つであると捉えることができる。美術教育を通じて、人間は文化の育成をしながら、個人を集団に組み込むことができるように努力している。美術教育を行うため、集団と社会の主体は、政治と行政において法律と政策を執行する。また教育の管理者と学校および教師の主体を通じて、各家庭と地域の主体とが連携しながら、生徒を教え育て、集団と社会が期待する新しい人間と主体性を育成しようとする。それぞれの主体の積極性を引き出しながら、より高い次元、より高い成果をとまなう教育システムを構築することが教育の目標とも言えよう。そこで最も難しいのは、生徒の優れた主体性の育成とその主体性による学習ということである。

以上のように、美術教育に関わる主体としては複数考えられるが、概ね二つのグループに分けることができよう。一つは教育側の主体であり、政府、学校、家庭、企業そして地域などがある。もう一つは学習側あるいは被教育側の主体であり、主に生徒たちである。教育側の主体と被教育側の主体という構造が、伝統文化あるいは民族（国民）文化の伝承と継承の機能を担当している。

### 2-3. 主体性形成と伝統文化の美術教育との関係性

美術教育の現場に伝統文化の内容を導入する場合、主体性形成に関していくつかの仕組みがある。まず美術教育に関して、表現者主体の意識が、表現物を媒介として、鑑賞者である生徒と繋がる。さらに学校と教師は、生徒に美術と伝統文化に関する内容を教育し、美術と民族（国民）文化を生徒に伝承する。この複数の主体の登場によって、美術と伝統文化を含む教育目標と生徒の主体性形成を目標とする水準へと引き上げようとする。

生徒の主体性は、文化における精神的な部分として、人が誕生してから社会的な教育と個人の学習を通じて形成

されていく。この過程において「伝統」という要素を強化するならば、民族と国民に対する民族文化と国民文化の意識が強化される。結果として、形成される主体性のうちに、個人的あるいは社会的な民族性と国民性が深く定着する。伝統文化を取り入れた美術教育による主体性形成は、文化の形成に帰着するものとして捉えられる。文化のなかの教育という手段を通じて、伝統と美術を教育の内容として教え育て、集団と社会の教育方針に基づく文化と主体性が形成されることになる。

このように伝統文化の教育の強化には、主体性が持つ社会性として、集団と社会が民族（国民）文化を強調する方向がある。その一方でまた、主体の自主性としての個性を育成する方向もある。両者の均衡をとりながら進めていくことが、主体性形成においてより重要であろう。

## 3. 美術教育における伝統文化に基づいた主体性の形成

### 3-1. 生徒の主体性形成の目標と義務教育の目標との関係

生徒の成長を社会が望む方向や水準にまで押し進めることは、教育の基本目標のひとつでもあろう。教育に関わる主体は数多いが、教育の結果において重要なこととは、生徒の主体性形成である。以下では、義務教育の目標と主体性形成の目標との関係を検討しながら、主体性形成の目標を明らかにする。

義務教育の基本的な目標として、中国政府は学生の「徳、智、体、美の全面的な発展」を掲げている。また中国の美術教育の課程標準（2011年版）によると、教科の「総目標を「知識と技能」、「過程と方法」、「感情、態度と価値観」の三つの次元に設定している」<sup>16</sup>。

日本の場合、平成28年度「中央教育審議会答申」によると、「教育基本法第2条は、教育の目的を実現するため、知・徳・体の調和のとれた発達を基本とし」<sup>17</sup>、また「学校教育法第30条第2項が定める学校教育において重視すべき三要素（「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体的に学習に取り込む態度）」<sup>18</sup>がある。「新学習指導要領（平成29年公示版）」の解説には、「知識及び技能の習得と、思考力、判断力、表現力等の育成、学びに向かう力、人間性等の涵養という「資質・能力の三つの柱」がバランスよく育まれるようにすることが求められる」とある。<sup>19</sup>

両国の共通点は、生徒に豊富な「知（智）」と健康な「体」を育て、健全な「徳」を持たせ、社会あるいは世界へ邁進する「生きる力」を教育する目標という点にある。この目標を達成するために、教育方法として、各教科には知能、理性、世界観の三つの座標からその内容を充実させることが求められている。

生徒にどのような主体性を形成させるのかということが、主体性形成あるいは主体性教育の目標である。生徒の個人としての主体は、主体意識と客体である身体とが合わさったものである。個人主体、客体（身体を含む）および他の主体である他者の三者は、それぞれ独立した概念である。「主体と身体」、「主体と客体」、「主体と主体」という三つの基本的な構図を整理してみると、主体意識は自己の身体をどのように認識するのか、主体は客体に対してどのように関わるのか、また主体は他者とのように共存しあうのか、という三つの課題に向き合う必要がある。この三つの課題が、生徒の主体性形成に関して、三つのより具体的な目標となると考えられる。

義務教育との関係からみれば、主体性形成は義務教育の目標の一つであり、主に主体から客体あるいは他者に対応していく能力を育成するための目標である。さらに、主体性形成を重視することは、義務教育における他の教育目標の実現を促す影響をも生み出す。

義務教育・学校教育の目的の一つとして、生徒に教育を施し、彼らを社会の一成員として送り込むことがある。そこで生徒は社会人になり、集団の構成員となる。一定の年齢に達すると、家庭を築き、公民になる。すなわち生徒としての主体から公民・国民としての主体となり、学習することが主であった主体から、成人としての責任と権利をそなえた主体へと移行する。生徒としての義務教育の目標を達成しても、続いて成人として成長していくためには、主体性の形成は継続される必要がある。主体性形成とは、生涯の課題でもある。

### 3-2. 生徒における主体性形成の内容と美術教育

ここで主体性の内容について、主に三つに分けて検討してみる。一つ目は、個人主体に関する認識である。二つ目は、主体と客体の関係において、主体が持つべき性質あるいは能力である。そして三つ目は、主体と主体との関係、主体同士の交流において、主体が持つべき性質と能力である。

生徒の主体性の内容については、中国における先行研究には、主体性の構成として「独立性、主動性、創造性」<sup>20</sup>が提案されており、その下にそれぞれ四つの項目が置かれる。また主体性の構成として「自主性、主動性、能動性、超越性」が考えられている。<sup>21</sup>さらに「自主性、能動性、創造性」と「社会性」を考慮した提案もあった。<sup>22</sup>

以上の先行研究等の成果に基づいて、本研究では主体性の性質についてさらに以下で明確に述べたい。

#### 3-2-1. 個人主体に関する性質

個人としての主体の性質とは、主に生存性と意識性だと捉えられる。ここでは主に、生存性に関して検討して

みる。人は幼い生命として誕生する。そこでは生命を維持する身体と身体を統御する主体性が機能している。何よりも生命を維持することが優先されて、身体の不調あるいは空腹の際には、たとえば泣くことによって援助を求めているという意味を表出し、周囲と交感・交流しあう。徐々に成長していくなかで、周囲の人々や環境に適応し、自己の身体維持に必要な栄養を求める。主体と主体性の基本は、まず誕生の際の遺伝のうちに存在しており、身体を統御するのみならず、生涯に渡って複雑な主体と主体性にまで成長する可能性を含んでいる。長い進化の過程においてもたらされた遺伝から始まって、幼児は社会による教育を通して、大人へと成長していく。

ここまでを要約すると、主体の最初の在り方は遺伝によって規定される。主体は、生命を終えるまで身体に属している。主体の身体に対する所属性である。さらにこの主体には、生きるために身体を制御する機能が備わる。主体による行為の制御は、初めは稚拙なものではあるが、訓練を通して複雑な所作も可能となる。主体性は成長する。

生存性には、もう一つの性質がある。それは生存の依存性ということである。幼児は親族・保護者による養育を必要とする。この養育期間は、哺乳類動物のなかでもとりわけ長い。幼児の成長初期における他の主体に対する生存の依存性は、主体性形成にとって大きな影響を及ぼす。

以上、個人としての主体の生存に関わる遺伝、所属、成長、依存性などの性質について言及した。生存に関連して、生徒の主体は、家族や保護者から自律するための準備期間が必要である。さらに、社会に参入すると、生存のための競争に関する生活と労働の経験が必要となる。主体は、生存、意識および制御を維持するため、常に身体生命維持を意識し、可能な限り、対象となる世界を認識し働きかけ、または世界（自然）から、あるいは他の主体（社会）からの支援を得て、自律して生きようになる。これが主体性教育にとって重要なことである。

#### 3-2-2. 主体と主体との関係に対する主体が持つ性質と能力

主体と主体との関係は、主体相互の交流において主体が持つべき性質と能力として検討される。しかし、生徒の年齢に応じて、成人とはその意味内容が異なる。児童・生徒は未成年であり、義務教育の期間にあるため、社会的な責任は免れるが、政治的権利は未だ付与されない国民である。こうした状況において、生徒は成長段階での未熟性、環境への適応性、そして豊かな主体性を築きうる可能性を秘めている。一般に、現代社会において主体性形成は、就学前期、在学期、就職期、定年期などの時期区分があり、各時期の主体性教育についても、合わせ

て考慮する必要がある。

生徒の主体性形成に関して、「生きる力」といった視点から、生存の経済、交流の能力、集団への依存という性質が挙げられるが、ここでは主に、美術教育に関する交流の能力と集団への依存性について検討してみる。

生徒の就学生活には、家族や社会からの支援が必要であり、関わっている他者や家族との適切な関係を維持する能力を育む必要がある。こうした能力とは、交流や理解という能力であり、交流手段と社会についての学習が不可欠となる。こうした交流の能力と手段として言語およびイメージの問題があり、次に美術教育に関わるイメージについて言及する。

イメージを伝達する際には、言語よりも図像の方がより直観的に伝達できることがある。意思疎通や思想的表現にも、様々な場面で図像がしばしば活用されている。図像としては、たとえば手画、説明図、文章の流れのPPT図、機械電気建築の工程図、製品デザイン図、俯瞰図、3D図、プログラムのフロー図、組織図、思考図等々が思い浮かぶ。これらの図像は、生活、労働、生産、工程、協議、発表の場面で、人と人との実際的な交流から切り離されない。さらに白黒ではなく、鮮やかな色彩を施した絵画や芸術造形品（彫刻、陶磁器など）、デザインを重視した商品、美観を宣伝する建造物などによって、美的感性は伝達される。こうした美意識の共感、社会の連携と協同、さらに様々な価値観と共鳴し合い、社会の幸福・安定・発展にも繋がろう。図像や芸術作品を創作し鑑賞することは、主体性の形成にも深い影響を及ぼすために重要であり、主体性教育には、美術教育が必須であるとも言える。

### 3-3. 生徒における主体性の機能と形成

生徒の主体性形成に関する時期について、ここでは主に学校教育における義務教育の時期を扱う。この時期の特徴は、地域と国を代表する学校が教育内容などを決め、授業は完全に教師による主導のもとで行われることにある。国、地域および学校などの教育主体は家庭にも関わって、保護者からも未成年の教育に対する有効な教育を促進してもらう。義務教育の時期において、生徒の主たる目的とは、教育を受け、学習を通じて生きる能力を身につけることにある。このことは、本人の意志よりも社会の合意や養育者を含む家族の意向のもとで決められる事項である。この時期の主体性形成は、主に学習とそれに関連する活動および生活による。

近年、人工知能（AI）の発達に伴って、「ディープラーニング」（中国では「深度学习」と呼ばれる）のような研究も発展しており、学習問題は永続的な課題となっている。しかし主体性の観点から眺めると、学習の主体

とは学習者であり、学習を通じてその主体性は形成されていく。この点では、学習の遂行と方法は、主体性形成の遂行や方法と同じであるとも考えられる。学習の成果と主体性形成の程度は、学習に対する熱意と学習の能力によって決定される。とりわけ自己学習、自己教育および自己創造などの「独学」が重要である。さらに、他者としての友人や教師および家族からも学習を援助してもらうことも重要となる。

美術教育とは、社会における交流や情報伝達に関する教育手段でもあり、美的感性あるいは芸術観を形成するための手段である。義務教育段階での生徒は未成年ではあるが、国や民族にとっては将来の希望が託される存在である。伝統文化に対する美的教育を通じて、豊かな主体性は形成される。生徒の主体性形成は、教育と学習とによるものであるが、伝統文化の内容を教育することは、国、地域そして家庭からの要請によるものである。生徒の自発的な学習と同様に、主体的なかたちでの伝統文化の教育の在り方を考慮する必要がある。教育する側も生徒の自発的な学習が可能となるように、協同学習、動機づけなど種々の手法を用いて授業への興味・関心・楽しさを高めて生徒の学習意欲を促進すべきであろう。

### 3-4. 教育側の主体性の機能と形成

上述のように、伝統文化の重視と美術教育および主体性形成については、それぞれに異なる目標と内容がある。成果を挙げるためには、教育する側の主導性が重要となる。また生徒の性質として、家庭における教育の在り方が重要となる。これに関連するかたちで、家庭と学校を緊密に結びつける「移動教育」、すなわちSNS社会通信ツールの活用方法について次に検討する。

#### 3-4-1. 教師の主導的な役割

教師は国、地方、学校の代表者として、教育現場での課題を解決する大きな責任を負っている。教師はその教育専門家としての立場からして、生徒にとっての権威は大きく、また学校で生徒と接する時間もきわめて長い。教育現場では、教学の主導権を保ち、生徒の主体性形成に対する影響もやはり大きい。教室外においても、学校、家庭、社会施設などと連携する際の中心的な存在でもある。教師は授業中に、生徒、教科書、教材を適切に管理・統御することができ、授業後にもカリキュラムの検討ができるので、生徒の主体性形成にとって重要な立場にある。以上の認識から、本研究で提案する授業改革案は基本的には教師を中心とするカリキュラム案となる。

#### 3-4-2. 家庭と学校による生徒の主体性形成について

家族は社会集団の最小単位でありながら、独立した存

在である。家族は、血縁、扶養、共同生活という関係から、氏族、民族、そして国といった集団に比べて、団結、行動一致、相互支援の要素が強い。こうした要因により、家庭と家族の主体性形成にとっては、家族の構成員相互の影響が外部から遥かに強く持続的である。従って生徒の主体性形成には、家族の在り方が大きく作用し、またその影響も著しい。近年、市場化経済における競争が激化するなかで、教育に対する家族からの意欲は、以前よりも強くなっている。家族としての主体による教育への熱意は、生徒の主体性形成にとって有利な条件となっている。

国と地方政府では、家庭を基盤として生徒を教育することで教育成果が挙がることを重視しており、家庭教育への支援と補助政策を頻繁に行っている。こうした点は、日本と中国ともに同様であり、各地方の教育当局が、家庭教育のガイダンス学校を設立し、家庭教育を担う家族を支援し、家庭教育のレベルアップを図ろうとしている。生徒の主体性の水準を上げるために、まずは家庭教育を担う家族の構成員の主体性を高めることが重視されており、かつ実践されている。これに関連して、家庭教育と学校教育とが連携する動きも活発化している。日本ではPTA会活動があるように、中国では「家長会」があるが、それ以外にも様々な連絡の経路が豊富に存在する。

家庭においては、伝統文化に根づいた母国教育を受けるか、あるいは外国での教育を選択するかどうかについて、家族内での意見が一致しないことがしばしば起こる。教育に対する認識度の相違によって、子どもと親の選択が異なる可能性も高い。裕福な家庭では、子どもを海外に留学させることがよくあるが、卒業してからも帰国しない場合など、両親の悩みの種になろう。家庭同様、地方や国においても同様の事態が想定される。こうした問題を解決する方法のひとつが、伝統文化の教育ともなろう。家庭教育を経由して伝統文化の教育を行うならば、そうした効果が期待できるかも知れない。

美術教育について多くの家族は、これを支持している。「入試戦争」の時代にあっても、家族は自分の子どもに美術・音楽・体育などの非「入試」科目を現在よりも多く授業を受けさせることを望んでいる。また家族は、子どもが積極的に多彩な才能と豊富な表現力を身につけることを勧めている。これは生徒の主体性形成にとって有利な条件でもある。そして、生徒が家族と理解し合い、家庭からの協力と支援を得ることは、生徒の主体性形成を保障するものであり、複数主体による教育支援として重要である。

### 3-5. 移動教育の手法による主体性形成の提案

主体性形成に関わる教育方法は、時代の変化に応じて、新たな創造的な構想が提示されている。例えば、アクティ

ブ・ラーニング法<sup>23</sup>などがある。本研究では、移動教育の手法として新しいSNS社会通信ツールに着目し<sup>24</sup>、「美術教育における伝統文化に基づいた主体性形成」という課題に応用し、その可能性と有用性を確認してみたい。

#### 3-5-1. 移動教育とその課題

まず、生徒の主体性形成について、教育する側からの複数の主体に対する教育をより有効なものとする方法について検討してみたい。教師、家庭、生徒との間で意思疎通する方法としては、電話、手紙、家庭訪問、「家长会」、親の来校、E-MAILなどの方法が周知のものである。これらの方法には、そのいずれにも弱点がある。経費がかさみ、即時的ではなく、保護者が集合する時間をなかなか確保できないなどの状況があり、教師と家庭との連絡が困難であることが課題として挙げられてきた。対して教育現場からの要望としては、教師と家庭との連絡に関わり、一人対多数の人々あるいは多数の人々同士で、即時的に音声、文字、図表、図像、写真、動画などの大量のデータ伝達が可能となる通信手法が求められている。

近年、インターネットと無線通信の急速な発展により、「移動教育」(Mobile Education)が誕生し、教育方法の新たな領域として、様々な可能性を示し始めている。移動教育とは、通信教育の一種であり、インターネットと無線通信の技術に基づいて、軽量のiPadやスマートフォンなどの携帯可能な端末機器を活用する教育である。教育のための場所は固定されず、時間的な制約もない。教育側と被教育側による自由な選択が可能であり、教育内容も多様化されるという特徴がある。

移動教育の主催者としては、社会や学校がある。社会的な場合、その主体としては政府機関、企業、個人があり、営利と非営利の区別がある。学校からの場合、学校のホームページまたは学校、教師、生徒と家族間の連絡の新しい手段として利用されている。また移動できる端末に、ソフトウェアとして、それぞれの教育側が開発した専用ツールや汎用の新しいSNS社会通信ツールを使用する。汎用の新しいSNS社会通信ツールとしては、中国の〔微信〕<sup>25</sup>や日本の〔LINE〕<sup>26</sup>などがある。

本研究では、中国の〔微信〕に注目し、学校・家庭・学生とのあいだの新しい連絡手段および教育方法として、「美術教育における伝統文化に関する主体性形成」という課題に応用し、その可能性と有用性を検討する。

#### 3-5-2. 〔微信〕の特徴

〔微信〕とは、個人パソコン用のインターネット無料通信ツールを介した携帯の簡略進化版である。〔微信〕を使えば、音声、メッセージ、ファイル、画像、映像といったデータを転送することができ、さらに、電話とテレビ

電話も可能であり、大変に便利な無料ツールである。さらに誰かを「群主」とし、群主が「群」というグループを登録して作成し、後に参加する人々は互いに様々なメッセージを交換することができる。

〔微信〕は、携帯番号を持つ人は誰でも登録することができ、無線 Wi-Fi があれば、携帯電話でも通信費を使わない。中国でも光ケーブルを家屋に引き込むことができ、一般的に中国の家庭で利用できる。どの家庭でもインターネットを使うことができるため、スマートフォンの普及により、〔微信〕も一気に普及している。また無線 Wi-Fi がない場合でも、携帯の 4G 通信の料金が都市部では安価であり、電車や街中でもスマートフォンを使用している人は多い。このように、どこでも、いつでも、または一人対多数、多数の人々同士で、即時的に声、文字、図表、図像、写真、動画などの大量データを送受信できる手段として、各分野で利用されている。

ここで〔微信〕の使用法について簡単に説明しておく。あらかじめ個人の〔微信〕の番号を申請するが、その際の基本条件としては、個人の携帯番号が必要とされる。まず、インターネットで〔微信〕の APP をダウンロードし、〔微信〕の APP を開く。続いて、〔微信〕の APP の画面で、他人と〔微信〕の番号を互いに登録し合う。さらに、誰かが「群主」になり、「微信」の APP の中に、「群」を作り登録し、「群」の運営が始まる。最終的には、「群主」の呼びかけに対し、皆が参加し、「群」の画面で、互いの言葉、音声、写真、動画をオンラインで交流し合う。

以上のように、現在どの生徒の家庭でも、〔微信〕で連絡できる状況が備わっている。すなわち教師が積極的に活用するなら、生徒の保護者に連絡し、無料電話会議や移动通信教育ができる、という状況になっている。

### 3-5-3. 美術教育における伝統文化に基づいた主体形成に関する新しい改善案について

本研究の目的は「美術教育における伝統文化に基づいた主体性形成」という課題に対して、具体的で実効的な教育方法を提案することにある。こうした課題のために、次のような「改善案」を提示してみる。

主な流れは、以下のようになる。

- A. 1 回目の授業において伝統文化に関わる作品について授業し、生徒に興味を起こさせる。
- B. 宿題の題材を与え、創造性のある作品を生徒に求める。
- C. 〔微信〕で家庭と連絡を取りながら、家庭から生徒に働きかける。
- D. 2 回目の授業において生徒の作品の鑑賞と評価を行う。

具体的には、次の目標と内容で授業を行う。

- A. 1 回目の授業では、まず伝統文化の内容と形式に照らして、美術教育の内容に合うように、一種類の題材を授業内容とする。次に、美術作品として実用的なデザインで物を作る。これにより、作った物をすぐにも使用することができ、また家に持ち帰ることで、子どもに動機づけの効果が期待できる。続いて、生徒をいくつかの小グループに分けて、グループで同じ題材で作品を作ってみる。同じグループの生徒たちは、多様なデザインを試み、作品の美術性が育成される。
- B. 宿題の題材を与え、生徒に創造性のある作品を求める。1 回目の授業の終わりに宿題の題材を与え、作品の完成度を高める機会を設け、生徒の創造力を訓練することで、主体性形成に繋げる。
- C. 〔微信〕で家庭と連絡を取り合い、家庭から生徒に宿題を完成するよう働きかける。また生徒の親と〔微信〕で連絡を取り、子どもの作品に対する感想、ならびに子どもと話し合ったあとで、この授業に対する感想を求める。親に伝統文化と美術教育の主体性形成の影響を確認する。
- D. 2 回目の授業では、生徒の作品の鑑賞と評価を行う。グループごとに、作成した作品を撮影し、写真を壁などに貼り付けて、全員で鑑賞し評価し合う。さらに、生徒に意見・感想を求め、どの程度授業の意義が達成されているかどうかを確認する。また生徒の主体性形成にどのような影響が及ぶのかを確認する。

## 4. 切紙を題材とした主体性形成

本章では、前章で示した「美術教育における伝統文化に基づいた主体性形成に関する新しい改善案」についての実験として、伝統文化の切紙を題材に中国の二つの小学校で行った授業について成果を報告し、「改善案」の有効性を確認したい。

### 4-1. 伝統文化の切紙に関する教育研究と主体性形成についての調査について

中国の切紙は「剪紙」と呼ばれており、伝統的な民間美術の一つである。2006 年には中国の国家無形文化遺産（国家級非物質文化遺産）、2009 年にはユネスコ世界無形文化遺産にも指定されている。中国における切紙に関する歴史のおよび工芸的な研究は既に多くあり<sup>27</sup>、切紙が行われている地域は中国だけではなく、日本、韓国、インド、またはフランスにもある。<sup>28</sup>

美術教育の題材や教材からみた、切紙に関する研究と

して、日本には「数学的な線対称式で得られる形状とその考察」による研究がある<sup>29</sup>。また「民間美術の剪紙への信仰、剪紙作品の鑑賞方法、剪紙文化が発達した条件、剪紙生産の現状などを確認しながら、「剪紙とは何か」を題材にした教材研究もある<sup>30</sup>。さらに鑑賞のために、「代表的な「窓花」に注目し、その定義づけや歴史についての基礎的知識」<sup>31</sup>を紹介した研究がある。それ以外に、中国の義烏市における小学校の美術科授業では、「剪紙」を「ものづくり教育」の規範として検討している<sup>32</sup>。実際に中国の各地では、切紙を教材として使用する学校が多く、学校ごとに教科書も開発されて使われている。

現状を把握するため、2016年3月14日に中国陝西省甘泉県第一小学校で、切紙を教材とする美術の授業を視察した。

そこでは授業の導入から終了までの時間が短く、完成を急がせるために最終的には早さを競う授業展開となっており、導入時や展開の前半部で指導した切り方や丁寧な製作という題材の本来の狙いは不明確になっていると感じた。授業の最後に、まとめや評価の時間がなかったことも残念であったが、生徒たちの作品は一定の水準に達していた。

しかし、一番気になることは一斉教授の方式であり、はじめから最後まで、教師が一方的に教え、生徒が受け身で動くことである。技術を教える反面、伝統文化に対する好印象は生まれず、<sup>33</sup>主体性形成の例としては、必ずしも適切なものではなかった。このような教育現場では、伝統文化教育の充実に際して、教師による一方的な指導性が強く、生徒による自主性や主動性といった個性の涵養面が脆弱であり、教育側と被教育側との均衡が失われがちである。

#### 4-2. 主体性形成に関する切紙の表現と造型についての「改善案」と実践

前章で検討した構想と方法により、切紙の実験授業を計画し、2017年5月下旬から6月上旬まで実施した。

##### 4-2-1. 切紙の授業を通じた主体性形成の指導案と指導計画について

題材名は、「不思議な切紙、芸術的な作品を作ろう」とした。切紙の伝統的な技法を活かし、はさみや伝統色の紙を使い、様々なアイデアを生み出す。切紙という伝統文化を背景としながら、生徒に実用的かつ芸術的な作品を作ってもらおう。切紙による作品は、様々な創意工夫によって、生活環境のより優れた装飾にすることもできる。とりわけ、生徒が切紙に関する基本的な知識を習得することができるように、伝統文化に関する多彩な情報を生徒に伝える。

指導観としては、切紙を作ることを通して、生徒が背景としての伝統文化に対する認識と理解を深め、主体的に未知の領域を探求するように育成することである。生徒が積極的に伝統文化の知識を学ぶなかで、自主的な学習態度が喚起される。同時に、美術科目の創作活動を通じて、生徒の芸術に関する構想力と審美眼を高めていく。

題材の目標としては、生徒が伝統文化の知識を学ぶとともに、それが歴史的な価値を持つことを深く認識してもらうことである。伝統的な切紙細工の技法には、豊かな装飾性と実用性が共存している。様々な作品を展示し、生徒に自らの創意と構想力について気づいてもらう。

題材の評価基準に関して、「造型・表現」については、地域に根ざした切紙の伝統技法を活かし、手作りの楽しさを味わうことが挙げられる。また「デザイン・応用」については、自分なりのかたちを構想するとともに、既存の工芸品をより改善できるかどうかである。「鑑賞・批評」については、生徒自身が美術と伝統的な切紙文化との関係について思いを深め、地方の文化資源を活かして、こうした活動を生徒の日常生活により近づけることができるかどうかである。「総合・探求」については、生徒が積極的に美術とその他の教科、美術と社会生活との関係に思いを寄せられるかどうかである。

1回目の授業の学習目標は、切紙の教育活動を通じて、生徒の学習に対する主体性形成を促進すること、2回目の授業の学習目標は、伝統文化の切紙を通して、民間芸術が生活のなかで果たす意義や価値を認識し、伝統文化に関する理解を促進することである。

1回目の学習内容は、アイデアを生み出して、芸術的でありかつ実用性のあるものを作ることにする。そして、自らの学習にも活用でき、または日常生活を豊かにできるような学習活動を求める。

2回目の学習内容としては、生徒が伝統文化に関わる未知の領域を積極的に調査・探求してもらい、自ら学習内容を調整できる能力を培うことにする。

以上の指導案に基づいて、2回ずつ実験授業を行い、新たな「改善案」を実践した。まず2017年5月26日と6月2日に、中国陝西省甘泉県第一小学校の第5学年4組(42名)において、ついで2017年5月27日と6月6日に、中国陝西省安塞県第一小学校第5学年6組(60名)で行なった。

##### 4-2-2. 第1回目の授業実践

授業冒頭で、伝統文化としての切紙を紹介しながら、生徒に伝統文化との関わりやそれに関連する取り組みについて理解を促した。続いて、グループごとに題材とサンプルを与えて、生徒に創造性を強調した。その後、同じグループに同じ題材を提示し、生徒にはサンプルとは異

なる多様なデザインとすることを求めた。これにより、作品の美術性と創造性を刺激し、主体性形成に繋げようと考えた。

実際には今回の中国の小学校では、生徒数が多いため、通常の授業でのグループ型の授業を行なうことが難しい。クラスには約60名の生徒がいるので、相互に交流し合う機会が少ない。今回は、学校側と事前に相談のうえ同意してもらった。そして、実践活動としてグループで行う指導案を設定して実行した。

授業では、主体性形成に繋がるようなサンプルを通して生徒に興味を起こさせ、グループ内で生徒が積極的に学び合い、相互の援助学習や教師の適切な指導によって、生徒の主动性が育まれることを狙いとした。

切紙の内容としては、歴史上の人物画や動物の絵などではなく、たとえば帽子、ペン飾り、葉といったきわめて日常的で実用性のあるものを作ることから始めた。これにより、生徒は作ったものをすぐに使うことができ、また持ち帰ることもできる。実用性と面白さから、子どもへの動機づけの効果を期待した。題材例として図案のサンプルを提示してみたが、実際のところ生徒はそれらを変形することが多かった。たとえばペン飾り、帽子、机上の置きもの（装飾品）、写真フレーム、クリスマス・カードなどがあつた。軸に沿った折り方で対称作品を作ることは、幾何の学習とも繋がる。また自身で下書き（描画）と絵を描き、想像力を働かせて構想を練る様子も見受けられた。

一回45分の授業時間では、切紙の紹介からグループ分け、さらに実践作業まで行なうため、時間不足を感じた。作品も少数の生徒だけが完成することができ、その完成度も低かった。この状況を改善するために、今回の実験案では、続けて宿題として、生徒に切紙の作品を持ち帰らせて自宅で完成させて、次回の授業では、作品の鑑賞と評価を続けることを設定した。生徒には時間をかけて創作力を発揮してもらい、完成度の高い作品とすることを求めた。

#### 4-2-3. [微信]の交流による教師と家庭の複数主体による協同教育の実践

今回の「実験案」では、生徒が宿題を持ち帰った後に、家庭と教師の協同教育の段階へと移行した。まず、美術科担当教師の名義で[微信]に登録し、次に美術科担当教師が「群主」の名義で「群」を作り、生徒の保護者に対して「群」への参加を呼びかけた。「群」のなかで、保護者に対して伝統文化と美術教育の意義を説明し、切紙の宿題での支援を依頼した。最後に保護者にも、今回の切紙の授業に関する意見・感想を求めた。

上記のような手順を考えたが、実際には甘泉県第1小

学校での応用状況は、順調とは言えなかった。美術科の教師に依頼したのであるが、5名の保護者しか「群」に参加交流しなかった。この状況を変えるため、その原因について尋ねてみたが、保護者たちによると、自分たちはあまり美術教育には向いていない、ということであった。因みに保護者たちは、担任教師が一番人気のあることを教えてくれたのであるが、担任教師には今回は協力してもらえなかった。

しかし次の安塞県第1小学校では、実験授業は順調に行うことができた。美術科の教師から担任教師に依頼してもらい、すぐに引き受けていただいた。そして多数の保護者(94名)が「群」に集まり、交流することができた。

このことから分かるのは、家庭と社会の連携には、美術科の教師だけではなく、学校全体で努力をしなければ、協同教育は難しいということである。そして、主体性形成とは、生徒のみの課題であるのではなく、同時に教師と学校全体の主体性もまた変革される必要があるということである。

今回、保護者と[微信]で連絡を取り合い、子どもとの話し合い後で、保護者から作品とこの授業に対する意見を求めた。これにより、生徒および保護者において、伝統文化と美術教育に対する関心が見受けられた。

#### 4-2-4. 第2回目の「鑑賞・批評」の実験授業について

1回目の作品製作を経て、2回目では完成作品に対する「鑑賞・批評」を行なった。比較および討論によって、クラスメートによる多彩な題材による作品を鑑賞し、それらの意義を相互に説明し合いながら自己の考え方・意見を述べてもらった。ここでの「鑑賞・批評」の目標とは、作品について生徒自身がその優れた点や美しさ、各自が感じ取った内容について発表することであった。

1回目と同様に、グループ分けを行った。甘泉第1小学校では5グループ、安塞第1小学校では7グループに分けた。各グループのリーダーには、成績の良い生徒あるいは人気のある生徒が選ばれた。またグループによっては、生徒が自主的にリーダーを担当した。リーダーはグループを代表し、クラスメートに配慮し、発言内容や感想評価の書類の配布、アンケート調査票の収集などの仕事を積極的に受け持ってくれた。こうしたことにも、生徒の主体性がよく感じ取られた。

個人の発表については、生徒はごく簡単な美術用語を使って、口頭により作品に対する感想や意見を発表した。あるグループでは、一人ずつ自分の作品について発表した。あるグループでは、代表者が全体の意見について発表した。その他にも、生徒は自己評価表に記入して、他の生徒に対する協力や意見交換などについて、主体的に

様々な交流を行った。

さらに、準備したカメラを使って、生徒の顔を撮影しておいた。また小型プリンターを用意して、授業で制作した作品を撮影・出力し、これらの写真を教室の壁に貼り付けた。その理由の一つは、生徒の学習意欲を刺激するためである。毎日、自分が作った作品を成果として眺めることができる。また自分だけではなく、他のクラスメートの作品も見ることができる。二つ目の理由は、学習の場所を美しくするためである。教室には雑多な掲示物がたくさんあるが、自分の姿を皆の前で表現できる機会は意外と少ない。

クラスの代表児童が優秀な生徒には、特別の栄誉として、個人の写真が付けられる。また中国では、担任教師らの写真が教室の前方に掲示されることがある。今回、あえて生徒全員の写真とその作品写真を壁に掲示することによって、彼らに名誉と責任を感じさせることとなった。

今回の「改善案」による実験授業は、以上である。

#### 4-3. 切紙に関する「改善案」の教育効果と課題

実験授業2回のデータを持ち帰り分析した。

##### 4-3-1. 生徒、保護者および教師の反応について

今回、両校ともにほぼ全員の生徒からアンケートを回収できた。その結果をまとめ、生徒の受け止め方を確認した。今回の授業について、基本的には「面白い」「楽しい」「好き」といった肯定的な表現が目についた。一部の生徒には、満足感や達成感といった感情も認められた。実際に現場で撮影した写真や映像のなかにも、そうした表情が見受けられた。

〔微信〕による保護者との交流を、今回の実験授業に初めて採用し、実現することができ、交流の記録結果も数多く収集できた。保護者たちは、ほぼ全面的に伝統文化と美術教育に対して肯定的な印象を持っており、相当の期待感を持っている。

また生徒や保護者の反応だけではなく、現地で安塞県第一小学校の美術科の沈先生にインタビューし、新しい「改善案」による実験授業について、肯定的な見解を得ることができた<sup>34</sup>。

##### 4-3-2. 中国の従来の授業方法と新しい授業方法との比較

新しい授業方法は、教材・生徒の座り方・授業の進め方・動機づけの方法、そして評価方法の面で、従来までの授業方法と異なる。さらに〔微信〕による保護者との交流は、従来は考えられないことであった。中国での従来の授業方法は一斉教授方式であるため、今回の方法はそれとは異なり、結果も異なる。生徒の学習態度や創造性が大きく変わる機会ともなる。

根底から授業観が異なるのであり、主体性形成・複数主体の共同学習・協同教育、そして動機づけの理論も異なるので、その結果に差異が生じるのも当然である。

##### 4-3-3. 日本のアクティブ・ラーニング法との比較

今回の新しい授業方法は、日本でのアクティブ・ラーニング法を参考にするところがあった。例えば、グループ分けすること、全作品を掲示すること、全員で評価し合うことなどである。ただし今回の取り組みには、やや特徴的な点もある。まず教材が実用的なものであり、生徒の動機づけや創造性を引き出すように工夫している。次に、教育現場で生徒とその作品を撮影し、即時にプリントすることで、生徒が短時間のうちに学習結果をフィードバックでき、理解や記憶することにも効果的であった。さらに「微信」の交流による教師と家庭の複数主体の協同教育を行なったことにより、伝統文化と美術教育に対する主体性形成意義を改めて確認することができたといった成果が認められた。

##### 4-3-4. 中国の二つの小学校の比較について

今回、二つの小学校で新たな「改善案」に基づいた実験授業を行い、その比較結果として、次のようなことが認められた。

まず生徒の作品に現れるデザインの豊富さを比較すると、甘泉第一小学校よりも安塞第一小学校の方がより優れている。次に伝統文化に対しては、美術教師と担任教師の協力関係の点で、安塞第一小学校の方が主動性の側面でもより強いと感じる。さらに、安塞県の街中には芸術的な装飾が多く見受けられる。

安塞県の地方政府は、伝統芸術を常に大切にしている地域であり、しばしば国・省からも奨励されている。こうした地方の姿勢により、伝統文化の伝承と認識が深められており、このことは市民にも影響している。

##### 4-3-5. 実験授業の結論と課題について

以上、実験授業の結果をこれまでの教育と比較しながら、本研究で提示した「改善案」の効果と妥当性を確認してみた。

今後の課題としては、次の点が挙げられる。まず場所の制約があって、全校的な展開とすることが困難である。また教材のサンプルが不足している。そして生徒のグループ分けの方法についても検討する余地がある。同時に生徒の評価方法もまた、更に詳細に改善していかなくてはならない。移動教育に関わる理論構築とその実践応用については、更なる研究の積み重ねが必要であろう。

## 終わりに

本研究から、以下の結果を得た。

1. 伝統文化・美術教育・主体性形成について検討し、その基本的な構造を明らかにした。
2. 生徒の主体性の目標と内容を検討し、特に生存と交流について提示した。家庭教育の重要性、イメージを媒介として交流し合い、創造に繋げていく意義を示して、主体性形成教育の「改善案」として提示した。
3. 教育と主体性形成は、複数の主体によって行われる事柄であり、とりわけ複数主体の参加が重要となる。特に伝統文化は、国と地方が積極的に対応し、家庭との連携により生徒への教育を支援・充実することが求められる。
4. 移動教育という新たな通信ツールを活用し、学校・家庭・生徒が密接に結びつくことで、新しい主体性形成の「改善案」を推進することが必要である。
5. 実際に本研究で提案した「改善案」による実験授業を試行し、相応の手掛かりが得られた。
6. 今後の課題として、主体性の評価をどのように客観的なかたちで数値化するかという検討が必要である。

以上、本研究の主題に関する包括的な研究が未だ少ない現状のなかで、理論と実践の両面にわたって構想案を提出した。美術教育の現場にどのようにして伝統文化と主体性形成を対応させていくかについても課題が山積しており、今後とも精力的な研究が必要である。

## 註

- 1 奈須正裕『よくわかる 小学校・中学校 新学習指導要領 全文と要点解説』、教育開発研究所、2017年 pp.99-254。
- 2 張 亜寧(翻訳)「中国の義務教育「美術課程標準(2011年版)」」、『京都市立芸術大学美術学部 研究紀要』第58号、2014年、pp.61-73。
- 3 中共中央办公厅 国务院办公厅《关于实施中华优秀传统文化传承发展工程的意见》、新华社、2017年 [http://www.gov.cn/zhengce/2017-01/25/content\\_5163472.htm](http://www.gov.cn/zhengce/2017-01/25/content_5163472.htm)
- 4 赵振利、刘大明「学生主体性教育研究述评」、『辽宁师范大学学报(社科版)』、第3期、1999年、pp.31-33。
- 5 蓝维「现代教育、主体教育、素质教育在学校教育中的整合」、『首都师范大学学报(社会科学版)』、总第142期 第5期、2001年、pp.107-113。
- 6 张建桥「论学生主体性的生成机制」、『教育导刊』、上半月、2013年、pp.9-11。
- 7 楊欣「現代中国の教育哲学におけるマルクス主義的教育関係論」、『教育哲学研究』、第112号、教育哲学会、2015年、pp.170-185。
- 8 武诤丁「王国维美育观简论」、『辽宁师范大学学报(社科版)』、第6期、1999年、pp.59~62。
- 9 方英敏「身体美育与审美教育」、『贵州大学学报·艺术版』、第29卷第4期、2015年、pp.46-53。
- 10 周冠生「试论艺术教育与美学教育 - 关于审美素质系统与结构的思考 -」、『教育研究』、第11期、1996年、pp.48-52。
- 11 冷德诚、司有仑「两种美育说评析」、『清华大学教育研究』、第3期、1997年、pp.54-59。
- 12 中共中央国务院『关于深化教育改革, 全面推进素质教育的决定』、新华社、1999年、<http://www.moe.gov.cn/publicfiles/business/htmlfiles/moe/moe177/200407/2478.html>
- 13 柯立红「试论学校美育中的美术教育」、『福建教育学院学报』、第2期、2012年、pp.17-19。
- 14 王小江、肖猫生、杜必莹「美育教学在美术教学中的渗透」、『科技资讯』、N0.23、2017年、pp.151-152。
- 15 杨威、刘宇「习近平总书记关于中华优秀传统文化科学论断的理论视阈与思想维度」、『学术论坛』、第9期、2016年、pp.137-143。
- 16 註2 同書、pp.63-64。
- 17 大杉昭英『平成28年度中央教育審議会答申 全文と読み書き解説』、明治図書、2017年、p.21。
- 18 前掲書、p.36。
- 19 註1 同書、p.9。
- 20 北京师范大学教育系、河南安阳人民大道小学 联合实验组「小学生主体性发展实验与指标体系的建立测评研究」、『教育研究』、第12期、1994年、p.58。
- 21 王富英「学生主体性的要素结构系统及特质」、『教育科学论坛』、总第258期第12期、2008年、pp.15-18。
- 22 李霞『文革後中国基礎教育における「主体性」の育成』、東信堂、2015年、pp.177-178。
- 23 松下佳代『ディープ・アクティブラーニング』、勁草書房、2015年。
- 24 金城、志麻、神村、優華「中学生のLINEにおけるコミュニケーションの様相」、『琉球大学教育部 発達支援教育実践センター紀要』、No.8、2016年、pp.21-30。
- 25 郭淑梅「家族微信圈的文化传承及其性别价值」、『山东女子学院学报』、总第133期第3期、2017年、pp.57-62。
- 26 須田康之、大関達也、菊地康介、高山美畝、山我拓也、施姍、丁再月「LINEスタンプを用いたコミュニケーションの特質」、『兵庫教育大学 研究紀要』、第49巻、2016年、pp.1-8。
- 27 賴施虹「论剪纸艺术在中国传统文化中的地位和意义」、『温州大学学报(自然科学学报)』、2001年(5)、pp.19-21。
- 28 许美婷「吕胜中与马蒂斯剪纸艺术比较」、『包装学报』、第6卷第4期、2014年、pp.63-68。
- 29 富澤秀文「三つ折り式剪紙による造形」、『群馬大学教育学部 紀要』、第36巻、2001年、pp.43-56。
- 30 高橋 愛、向野康江「中国の剪紙作品を対象にした鑑賞教育教材研究」、『茨城大学 教育実践研究(22)』、2003年、pp.105-118。
- 31 高橋 愛「中学校・高等学校における美術鑑賞教育のための素材研究」、『玉川大学芸術学部 研究紀要』、2014年、pp.35-41。
- 32 佐藤昌彦「次世代「ものづくり教育のカリキュラム構想」への助走」、『美術教育学 美術科教育学会誌』、第36号、2015年、pp.193-205。
- 33 張 亜寧「中国における伝統的な美術の取り扱い—剪紙(切紙)を素材とした小学校の授業実践—」、『美』(京都市立芸術大学 美術教育研究会 研究誌)、第199号、2016年度、pp.24-29。
- 34 沈新艶先生のインタビューの内容。「こんにちは! 私たちの

児童に日頃はないような体験活動を美術授業へもたらし  
いただき、ありがとうございます。私は、ひとつひとつの切紙  
の作品から、あなたの伝統的な切紙と細工を巧みに融合する

ことを見ました。創造するすばらしさが現れた。さらに、子  
どもたちの顔から満ちあふれている楽しさ、収穫と自信を見  
ました。」、中国安塞県第一小学校美術科